第八回里山ワークキャンプ in 庄原
報告書

２０１３年３月８日

里山ワークキャンプ in 庄原実行委員会

１）はじめに

ワークキャンプとは、第一次大戦後の 1920 年に、敵国同士であったドイツとフランスの青年たちが、相互理解の為に始めた活動が始まりです。現在は、地域年代を問わず、あらゆる層の参加者が各地域で１～３週間共同生活をしながら、地域の住民と環境保護・福祉・農村開発等、色々な種類のボランティアを行うプロジェクトのことです。

川北町においては、２週間かけて行う NICE 国際ワークキャンプを 2000 年から 2004 年まで4回開催しました。また、土日にかけて行う週末ワークキャンプを、２０回以上開催しています。活動場所は主に矢の原、黒田原周辺で、活動内容は間伐、枝打ちといった山林整備、その材を利用したベンチ（バスセンター、日赤等に寄贈）や木のおもちゃ（川北保育所に寄贈）造り、畦草刈り、炭窯を作っての竹炭焼き、豆腐・こんにゃく作りといった農山村の生活を体験するものになっています。また、海外の参加者がいた事から、川北小学校へ訪問しての国際交流、地域住民とのパーティーなども行われていました。

しかし、諸事情により 2004 年を最後に、NICE 国際ワークキャンプを休止しています。

２）事業の概要

2－1)事業名	里山ワークキャンプ in 庄原
2－2)開催期間	2013 年2月 15 日～2 月 21 日(7日間)
2－3)開催地	広島県庄原市川北町
2－4)事業目的	① **地域の課題(環境保全、農林業、過疎化、高齢化など)を、現場での体験を通して考えてもらう** ② **地域の里山保全・整備につなげる** ③ 参加者と地元の方が交流する事によって、地域の活性化を図る
2－5)参加者	＊ワークキャンプ参加者 10 名 ＊他のボランティア:多数(一日平均 2～4 人) 詳しくは、「3)参加者と協力者」を参照
2－6)ワーク内容	① 枝打ち ② 間伐 ③ 竹林整備 ④ 竹チップ作り ⑤ 薪割り ⑥ きのこ菌打ち
2－7)他の活動	餅つき、餅花作り、ホームステイ、地域との交流
2－8)生活方法	八谷家貸家にて宿泊・食事
2－9)主催	里山ワークキャンプ実行委員会と北自治振興区の共催
2－10)後援・協力	後援:庄原市観光協会連合会、中国新聞社 協力:地域の方々
2－11)財政	＊参加者の開催地への移動費　:各自の自己負担 ＊開催中の宿泊・食費　:ひろしま森づくり県民税、参加者の参加費、寄付、積立金で賄う

３）参加者・協力者

３－１）ワークキャンプ参加者　（全参加６名＋部分参加３名）

名前	在住地	性	年	職業	備考
小森谷　由貴	東京都	女	20	大学生　2年	
山部　沙織	京都府	女	23	大学生　4年	
永田　宗之	東城町	男	59	自営業	
小野　わか奈	庄原市	女	19	大学生　1年	
吉田　翔	島根県	男	26	社会人	
赤池　慎吾	島根県	男	25	社会人	
太田　有紀	庄原市	女	21	大学生　3年	

３－２）地元の方々

大迫弘、高橋秀則、寺西玉美、大掛秀秋、後藤信彦、後藤ひろこ、清水忠昭、佐竹眞由美、酒井優、丸林進、鉄穴孝登、兼本修、

３－３）応援して下さった方々

川北小学校、アサヒの森環境事務所、入船浩平、明治大学生田ボランティアセンター

（順不同、敬称略）

４）開催前／後の大まかな流れ

４－１）開催に到った経緯

明治大学の早田教授が、首都圏の学生に対して、里山の保全活動を行うことで、里山を通して見えてくる地域の課題（環境・景観保全、農林業の衰退、森林の荒廃、過疎・高齢化など）を考え、地域の自然や環境についての知識を深めることを目的とした農山村体験を提供したいという思いを基に、NICE の行っている国際ワークキャンプをヒントにして、ワーキングステイを 2008 年夏、2009 年冬の 2 回、黒田原において開催しました。その後、この動きを継続・拡大させ、地域と深く関わり盛り上げていくために、名称を「里山ワークキャンプ in 庄原」に戻すとともに、地域に溶け込んだワークキャンプを目指して、共催に川北町のある北自治振興区を迎え、募集を明治大学だけでなく広く多くの大学、民間に拡大し、2010 年夏に「第 3 回里山ワークキャンプ in 庄原」（ワーキングステイから継続してカウントしている為、国際ワークキャンプは含めない。）を開催しました。さらに継続的な動きとして安定することと、地域への認知度が高まることを期待し、2011 年、初めて年度内で 2 回目の開催となる、「第 4 回里山ワークキャンプ in 庄原」を開催しました。この年 2 回のワークキャンプが、違う季節に来ることでいろいろな地域の顔を見られると予想以上に好評だったため、2012 年、2013 年も継続して年 2 回、夏と冬に開催することに決定しました。

４－２）本事業の開催までと今後の大まかな流れ

いつ		何を
12 年	11 月	本事業の開催と事業の骨格（期間・人数・ワーク内容など）を決定
		参加者の募集・案内開始
		実行委員会始動
	12 月	回覧で地域に告知
		事業の肉付け（ワークの場所・作業日を決定、宿泊施設を確保など）
		後援、講師依頼
13 年	1 月	しおりを作成
		地域へのあいさつ回り
		タイムテーブル、準備物リスト作成
	２月	本事業の本番を運営（2 月 15 日～2 月 21 日）
	３月	保険申請
		地域への報告
		事業報告書の作成

５）開催中の日程

５－１）開催中の日程

日付	午前	午後	夜
2/15　金		集合、オリエンテーション	歓迎パーティー
2/16　土	竹林整備、竹パウダー作り		懇親会
2/17　日	林業ワーク（間伐）		フリー
2/18　月	きのこ菌打ち	薪割り	フリー
2/19　火	林業ワーク（枝打ち）		ホームステイ
2/20　水	ホームステイ	鶏解体	お別れパーティー
2/21　木	解散		

6）事業の狙いと成果

今回のワークの狙いは大きく３つありました。

1　地域の課題(環境保全、農林業、過疎化、高齢化等)を、現場での体験を通して考えてもらう
2　ワークを地域の里山保全・整備につなげる
3　参加者と地元の方が交流する事によって、地域の活性化を図る

これらの成果としては、

1　林業、竹林整備等の作業を通して、地域の森林の現状を確認してもらい、その問題点を感じ取ってもらうことができた
2　里山整備、竹林整備で地域の環境保全に貢献できた
（里山整備：約 30 年生桧約 1ha の間伐・枝打ち、竹林整備：竹約 90 本の伐採・粉末化）
3　作業の最中や休憩中に地元の方が声をかけに来てくれたので、交流が頻繁に行われ、準備期間、開催期間を通して、地域がにぎやかになったという実感があった
（交流人口：延べ約 30 人　地域関係者：延べ約 40 人）

7）提言と今後の構想

今回のワークキャンプは年度内２回実施の 3 年目でしたが、今までの開催より絶対的に参加者が少なく、広報の問題、予定を立てる段階での問題が発露しました。

後方の問題では 2 か月前から募集を開始しましたが、詳細のスケジュールは２週間前にしか出すことができず、詳細スケジュールが分からないことから参加を控えた方もいたようで、次回以降は詳細スケジュールまで詰めてから募集を開始することが必須です。

また広報の問題点としては、関東圏の大学は明治大学頼みだったことから、明治大学生の参加が少ないと全体の参加者が一気に減ってしまうので、その他大学のボランティアセンターへも募集をかけられるように、次回までに連絡をして募集をかけさせてもらう必要があります。

また、今回は事務局が運営に関して時間を取ることができず、実行委員会を開かずに進めてしまったため、地域の方を個人的に誘うような形になってしまいました。そのことで、新しく関わっていただく方が増えず、参加者が多くなかったことから結果として足りないということにはなりませんでしたが、地域の参加者を呼び込む体制づくりの必要性を感じました。

地域の方々との協力という面では、企画段階から高橋さんにお世話になり、ホームステイでは夏に続いて佐竹さんが受け入れをしてひな壇の飾りつけという体験をさせてくださり、また猪の解体等では酒井さんをはじめ、鉄穴さんや大迫区長、丸林さんなど、多くの地域の方々のご協力を得て今回のワークを広く深く実施することができました。

大変にありがたいことであり、ワークキャンプとしてこの地域の協力を得ることに対し、様々な形で貢献していけるよう、更なる努力をする必要性を感じました。

ワークとしましては、林業を中心に構成し、仕事を横断的、連続的に体験するということで、きつさも体験しながら林業や里山の全体像に近づき、そこに暮らす意味なども体感できる要素がふんだんに盛り込まれたワークになりました。このワークのハードさは、特に去年及び前回のワ

ーキャン参加者のアンケートから取り入れられ、その結果、少しきつめで程よい量のワーク構成にすることができたと感じます。また前回より一つのワークに長時間裂くことがで、作業の習熟度を高めることができたことので、参加者の満足度はそれなりに高かったようです。

この、参加者の満足度を高めることと、ワークをすることのバランスをうまくとっていくことは今後のワークキャンプを企画していくうえで重要なポイントになるので、アンケート等を参考にしながら十分に検討していきたいところです。

ワーク時の参加者の意欲は全体を通して上々でしたが、その理由としては以前から続けているように、ワークの日の朝にすべての作業の意味や目的を説明し、ワークに対して目的意識を持って取り組むことができているからのようです。

この作業前の座学をこれからも継続すると同時に、大学生以上を相手にすることがほとんどなので、専門性を高め、更なる充実を図ることが大事になってくると思います。

全体を通しましては、だんだんとワーク内容がマンネリ化していくということを良いとするか、悪いとするかというところを考えていく必要がありそうです。林業、農業は常に１年のサイクルを持ち田舎の生活を作り出していますが、毎年参加するようになると作業に対しての新鮮さを失う可能性があります。そこで習熟度を上げるということを目的とできるように、その方向に誘導できるようにワークを組んでいく必要がありそうです。

そのために、作業時のスタッフの確保や指導者の配置といった人員的な質と量を充実させていくよう、検討していきます。

また、時間的な問題で今回はディスカッションを行うことができなかったので、次回までにどう時間を確保するかを考えてタイムスケジュールを組むようにします。

次回は、ワークと体験、学習、交流のバランスが取れたワークキャンプを企画したいと思っております。特に地域との交流は時間をかけて準備段取りをし、たくさんの方に関わっていただけるようにしていくようにします。

８）おわりに

今回のワークキャンプは、年度内で２回開催の３年目ということもあり、すこしずつ慣れてきたところでしたが、まだまだ運営面では追われながらのことが多かったので、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。次回に向けて、準備からの更なる効率化と、運営の円滑化を心がけます。

ただ、夏と冬の季節の特色を明確化したワークをできるようになってきたと感じるので、ので、この流れをさらに伸ばし、来年度以降のワークキャンプと地域の充実、発展に繋げていければと思います。そのためにまだまだやらなければいけないことは山積みですが、一つ一つクリアしていこうと思います。

最後になりますが、今回も多くの方々のご助力、ご協力をいただき、皆様のおかげをもちまして成功のうちに終えることができました。本当にありがとうございました。次回以降もどうぞよろしくお願いします。

この事業は経費の一部に「ひろしま森づくり県民税」を利用しています。